

人里のニエスレタ

日本ホテルの会 1999/12 第13号

会の発展のために提言を

日本ホテルの会理事 小西正泰

近年、日本では北から南までホテルの保護や復活運動がさかんである。このような全国規模の社会現象は他の国にはみられない。平安時代からのホテルとの永いかわり方をも含めて、私はこれを「ホテル文化」と呼んでいる。

ところで、現今ホテルについて活動している多くの団体の規模や性格（目的）にもいろいろある。これを構成する各個人のタイプも多様である。

団体の規模には、対象地域の広さ（範囲）と加盟者の人数やタイプによる差がある。この地域の点では、「日本ホテルの会」と「全国ホテル研究会」が、いずれも全国をカバーする。けれども、それぞれの目的や特徴は異なっている。

日本ホテルの会は一口でいうと「学・官主導型」といってよい。すなわち、研究者と中央官庁や地方行政の当事者（管理職）などが、総会やシンポジウム等の行事において講演や討論の形で参加される。これは他の諸団体にはみられないユニークなところである。とくに中央官庁の当事者から意見や計画などを聞き、また直接に質疑応答

ができるというのは、なかなか得がたい好機なのではなかろうか。会員各位には、この特徴を今後とも積極的に活用していただきたいと思う。

つぎに、各団体を構成する個人メンバーのタイプも多様である。これを大別すると、ナチュラリスト（研究者をふくむ）、環境（保護）派、イベント派の三タイプに分けられる。ただし、どれがよいかということとは別の問題である。

ナチュラリストは少数派であり、環境派は多数派である。私見では、後者はとかく理屈が多く、打合わせや会議が多いわりには物ごとが決まりにくく、貴重な時間を費やしているように思う。

イベントには集めようとする対象がいろいろあり、会員のみの場合、不特定多数の場合、子ども（小学生など）主体の場合などもあり、その目的に応じて催しものも変わってくる。それで、準備する当事者たちの苦労はたいへんなものになる。

以上は一般論であるが、全国に散在する当会会員のそれぞれの現地における活動の実態を私は把握していない。当会の課題

は、減少傾向にある会員数を増加させたい。そのためには会員にとって魅力とメリットのある会でなければならない。そのメリットは会費の額に見合うということも重要であると思う。

今後の会の運営については、会員各位の率直なご意見、アイディア、アドバイスなどを事務局宛お寄せいただきたい。当会事務局には常駐の専任者はいないが、週1～2回、担当者（1～2名）が事務処理のた

め「出勤」しており、外部からの連絡事項等は整理されて理事会に報告される。理事会では、それらも含めて議案を検討し、会の運営に当たることになる。なお、会員各位から事務局へのご連絡は、郵便、電話（ルス電）、FAXのどれでも結構です。

以上、とりとめのめのないことを書きつらねたが、本会の発展のため積極的なご参画を期待したい。

第8回シンポジウム報告

日本ホテルの会理事 本多和彦

恒例の日本ホテルの会シンポジウム「ホテルを通じて身近な自然を考えるシンポジウム」が1999年10月12日、東京写真美術館（東京都恵比寿）にて開催されました。このシンポジウムは身の回りの生きもの、自然、生活などを通じて私達がどのように自然に関わり共生してきたか、あるいはどのように共生してゆくかを考えようとするもので、例年秋に開催して参りました。会員の方々を始め多くの方の協力により8回目を迎えることができました。

シンポジウム当日は晴天に恵まれ、約100人の聴衆を集めて行われました。当シンポジウムの特徴は、人里の自然に深く関わる行政機関の方を迎えて最新の話聞くという点にあり、今年も環境庁、農林水産省、建設省及び東京都において野生生物、農村環境、河川環境等の要職にあるみなさんをお招きしご講演いただきました。

シンポジウムは当会川村理事の開会挨拶に始まり、続いて矢島会長の講演が行われました。講演はゲンジボタルの幼虫が成長するまでにどれだけのカワニナを補食する

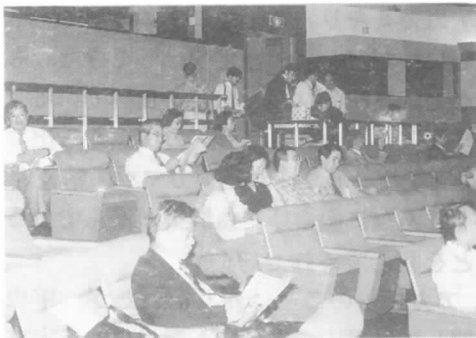
のだろうかということと、カワニナの大敵は何かという内容のもので、ホテルの棲む環境を考えるうえで貴重な報告でありました。続いて東京ホテル会議の小俣さんからクロマドボタルに関する講演が行われ、一般には少しなじみの薄い陸生ホテルについて興味深い報告がされました。このあと、省庁・自治体の最近の話題について講演がありました。環境庁野生生物課植田専門官からレッドデータブックに係るお話と佐渡トキ保護センターの「ゆうゆう」について紹介がありました。ホテルの会でトキの話というのはいささか場違いではとお考えになるかも知れませんが、トキはかつて水田に多く棲み、まさに人里を代表する生きものであったといえます。かつての豊かな人里を取り戻そう、いまある身近な自然を大切にしようとするシンポジウムに相応しい話題提供であったように思います。農林水産省からは農村環境対策室長の川合さんが、環境保全型農業など農林水産省の取り組みについて紹介してくださいました。この講演の中で現代の豊かな生活を支えてきたのは農業の効率化であり、これが自然

を変える一因となっているということ、自然を守るということは農業を変えるだけではできないというを考えてほしいという意見が述べられ、良い環境を保つことの難しさを考えさせられました。続いて建設省河川局足立建設専門官から講演があり、建設省の進める河川環境施策について説明がありました。多摩川を事例とした取り組みの状況、市民参加型の河川環境保全などについて分かりやすく紹介していただきました。最後に、東京都環境保全局今本水質監視課課長補佐から東京都の河川水質や生息する生物について報告が行われました。

講演終了後、各講師と会場とのフロアディスカッションが行われました。会場からは、住民と行政のパートナーシップに関することや民間企業の活動に関することある

いはホテルや生物の生態に関することなど多様な質問や意見が盛んに述べられ、これに対し各講師が分かりやすく、ていねいに答えてくださり、約一時間にわたり有意義なやり取りがなされ閉会となりました。本シンポジウムは、誰もが参加できるフロアディスカッションを大切に考えており、活発で前向きな意見交換が行われたことを喜ばしく感じました。

おしまいにご参加くださいました聴衆のみなさん、講師の方々並びにご後援いただきました官庁に対し感謝申し上げます。また、本シンポジウム開催に当たり梁瀬産業(株)様並びにキリンビール(株)様にご協賛いただきましたことを合わせて報告します。



里山の甲虫たち

日本ホテルの会理事 常喜 豊

私は日本ホテルの会の理事をやらせていただいているわりには、ホテルなど水辺の昆虫のことには詳しくない。そこで今回は陸上の甲虫を中心に、里山の昆虫のことを書かせてもらおうと思う。

「里山」の定義は難しいが、完全な人里と完全な山奥とをつなぐ緩衝地帯、というような認識をもっている。そこには人里とも山奥とも違った興味深い昆虫相がみられ、一般の人々にとって非常に良い自然教育環境となっているはずだが、我々はどうして

も「人間によってかなり荒らされた環境だから、あまり虫はいないだろう」などと思ってしまうがちである。小さい頃によく里山に連れていってもらい、カブトムシやクワガタムシを採って里山から多くを学んだ私でさえ、大学に入って北海道や沖縄に行けるようになると何となく里山の昆虫相を物足りなく思ったものだ。しかし実際には里山の昆虫相は驚くほど多様で、こんな所だと思うような珍しい虫がいたりする。私が里山の昆虫の面白さを再認識したの

は、大学院に入る頃からだった。

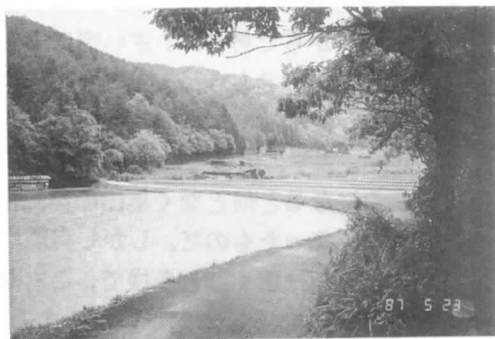
京都市の市街地の北に「岩倉」という地域（岩倉具視が隠れ住んだ土地として有名）があって、典型的な里山の風景が広がっている。ある日、私は大学院で同期の石井実氏（現大阪府立大学）らと、半分遊びの採集で岩倉に出かけた。現地に着いてすぐ、石井氏は飛んできたギフチョウを1頭採集した。このギフチョウは雌で、後日たくさんの卵を産んだ。これがひとつのきっかけとなって、石井氏はギフチョウの蛹休眠を学位論文のテーマに選ぶことになるのだが、それはさておき、ギフチョウが採れた5分後、今度は私がツツジの葉に止まっていた小さなカミキリムシを採集した。これはヒメシラオビカミキリという、比較的珍しいとされてきた種で、私自身北海道の山中で1頭しか採ったことがなく、こんな手軽な場所で2匹目が採れるなんてと感激したものだ。実際京都でのヒメシラオビカミキリの採集記録はなく、これが京都府初記録となった。

ヒメシラオビカミキリの幼虫は、針葉樹の枯枝を食べることが知られている。そこで、幼虫の食樹を調べようと思い、私はその後何回か岩倉に足を運んだ。その結果、ヒメシラオビカミキリの幼虫は、その辺にいくらかでも生えているアカマツの新しい枯枝を食べていることがわかったのである。

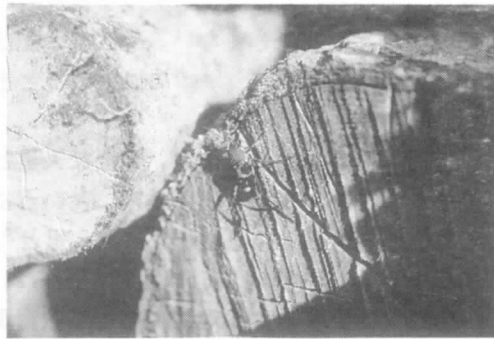
これは私にとって里山の面白さを再認識する大きなきっかけとなった。というのは、ヒメシラオビカミキリという虫は相当珍しいという印象があったから、こんな虫の幼虫はおそらく山奥にしか生えていないトドマツやシラビソといった格調高い針葉樹しか食べないだろう、などと勝手に想像していたのだ。それが、アカマツのような格調高くない（と言っては失礼だが）ものを食うのだから、私の珍しい虫に対するイメージが多少崩れるのと反対に、里山に対するイメージが上がった。

「格調高くない」などと悪口を言ってしまったが、岩倉でアカマツの枯枝を食べているカミキリムシ類は非常に多く、色々な状態の枯枝を持ち帰って室内で飼育したところ、キボシチビカミキリ、カラフトヒゲナガカミキリ、ケシカミキリなど比較的珍しい種がどんどん羽化脱出してきた。もともと広葉樹のクルミなどを食べているフタオビアラゲカミキリもアカマツから出てきたりして、ありふれたアカマツの枯枝内にもこんなに面白い甲虫群集が潜んでいることを教えてくれた。

アカマツのことばかり書いたが、甲虫に関しては里山の広葉樹も面白い。雑木林を代表するクヌギやコナラはシイタケのホダ木として用いられるが、生木を切ってしばらく積んでおく小さな貯木場は、トラカミ



京都市岩倉の里山風景



クヌギ丸太上のクピアカトラカミキリ

キリ類やサビカミキリ類,あるいはゾウムシやタマムシなどが活躍する絶好の場となる。

里山の甲虫の面白さは,東南アジアの熱帯林地域でも実感できた。東南アジアのそのような場所を「里山」と呼んでいいものか,ちょっと自信がないが,まあ人里と自然林との間にある地域であるからそう呼ばせてもらおうと,そこには原生林よりもむしろ多くの昆虫が見られる場合もある。

私は最近,熱帯でクロツヤムシという甲虫の一群の生態を調べている。クロツヤムシはクワガタムシに近いグループで,雌雄1ペアの成虫が林床の朽木にトンネルを掘り,中で幼虫を育てながら家族で暮らすという興味深い甲虫である。この虫の調査を行っている,原生林の中よりも道路脇や集落はずれの山の方に多く生息しているような気がしてきた。恐らく里山のような環

境の方が,木が伐採されて彼らのすみかになる朽木が多くなるからだろう。そう考えると,クロツヤムシのように,人間が環境を里山的に変えることを喜ぶ昆虫もかなり多くいるのではないかと思えてくる。

里山をどうしたら良いか,と尋ねられたら,多くの人は「そりゃあ重要な環境なのだから,守るのがいいに決まっている」と答えるだろう。しかし,具体的に里山のどんなところが重要なのか,本当にわかっている人は少ないのではないか。里山の価値を知ろうと思ったら,最も良い方法はやはり実際に里山に行き,半日ほどぶらぶらと散策してみることだろう。そんな身近に里山はない,などと言う人も多かろうが,それも間違いである。昔と比べたらずいぶん少なくなったが,まだまだ里山は都会の近くにたくさん残っており,我々を待っている。

水生昆虫談話会シンポジウム開催される

1999年12月18日(土),東京都立大学において水生昆虫談話会の第211会例会が開催されました。今回は2000年にむけてのカウントダウン記念シンポジウムとして「水生昆虫類の分子に基づく系統分類」というテーマで,以下の講演が行われました。1) 酵素多型に基づくコガタシマトビケラ類の分類(林 義雄,環境管理センター・環境基礎研究所), 2) 酵素多型とDNAに基づくホタル類の系統分類(鈴木浩文,東京都立大学・自然史科学講座), 3) コセアカアメンボのミトコンドリアDNA塩基配列の多様性と地理的分布(立川周二,東京農業大学・農学部), 4) ホタルトビケラ類の分子系統(上村佳孝,東京都立大学・理学部), 5) 分子系統からみたホタルトビケラ類の形態と生活史の進化パターン(野崎隆夫,神奈川県環境科学センター), 6) DNAの塩基配列と精子の形態に基づくトンボ類の系統樹(林 文男,東京都立大学・理学部)

酵素多型をマーカーとしたシマトビケラ類の幼虫と成虫の対応関係や,DNAからみホタル類の系統と発光様式の関係,南西諸島におけるコセアカアメンボ集団の遺伝的な類縁関係,ホタルトビケラ類やトンボ類についての系統関係と生活史や配偶行動の進化パターンなど,分子を使った系統分類と行動・生態学の接点に関する最新の話題が提供されました。

理事会報告

8月27日（金）および11月9日（金）に理事会が開催され、以下の事案について討議がなされました。1）ニュースレター12号の版下承認、2）入会案内の新規作成、3）シンポジウムの開催計画、4）ニュースレター13号の内容検討と発行計画、5）シンポジウムの決算報告。特に会計の本多理事からはシンポジウムの決算報告と共に、今後の会の運営上、来年度以降資金面で苦しいこと、実務スタッフが足りないことなどが具体的に数字で説明がなされ、資金手当、スタッフ募集の養成がなされました。

事務局からのお願い

現在、常駐する事務局員がおりませんので、当会への問い合わせなどについての対応が十分になされておらず、会員の皆様方には大変ご迷惑をおかけしております。

そのため事務局では、事務局運営にご協力いただけるボランティアの方を募集しております。仕事の内容は、日本ホタルの会（事務局所在地：渋谷）への郵便物やファックスによる問い合わせについての対応、ニュースレターやホタルと人里など出版物の編集作業、シンポジウムの準備、その他の行事の企画や立案などで、手伝って頂ける範囲でご協力をお願い致します。

また、本会の運営や今後の会の在り方などについてのご意見やニュースレターへの投稿原稿なども随時募集しておりますので、事務局までご連絡をお願い致します。

人里へのニュースレター 第13号 平成11年12月20日発行

編 集 日本ホタルの会 ニュースレター編集事務局

発 行 日本ホタルの会

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-13

大一ビル2F

TEL・FAX 03-3498-3345



印 刷 プリントランド・スガイ

〒239-0815 神奈川県横須賀市浦上台2-27-936

TEL 0468-43-1356 FAX 0468-43-1366